

イーマ・サウンドセラピーの最新デバイス
OTOseron体感セミナー &
オトトロン
「認定プラクティショナー養成講座」説明会

参加特典 1

松下幸訓先生書き下ろし
「イーマ・サウンドセラピー」
誕生秘話



E-ma Sound Therapy
イーマ・サウンドセラピー

イーマ・サウンドセラピー誕生秘話

イーマ・サウンドセラピー創始者
松下幸訓



私とマナーズ博士との出会い

私は英国の大学を卒業してからロンドンに住んでおり結婚もしました。1990年5月13日に3女が生まれました。

大変喜ばしいことでしたが、生まれて2週間が過ぎたころ、担当の医師から「先天性右股関節変形症」という、その名の通り股関節が変形しており、ソケットに大腿骨が入らないという、重大な病気であることが告げられました。

「現在の状態では何もできず、骨がある程度しっかりしてくる3歳から人工の股関節に変える必要がある。そして、体が成長していくので20歳を過ぎるまで、毎年手術をして取り替えていかなければいけない。」と言われ、私たちは大変なショックを受けました。

何か手立てはないものだろうか。

私の妻（当時）は未熟児専門の部署で働いていた看護師だったということもあり、その分野で実績のある医師を頼ることにしました。その数は10数人に及びます。

ただ、どの先生が診ても、はじめの先生が仰ったのとほぼ同じ診断。最後にこの先生の診断が同じであればあきらめようと頼ったのが、イギリスのオリンピック選手の強化担当の著名なドクターだったのですが、その先生だけがレントゲン写真を見ながら、少し違うことをおっしゃいました。

「ある角度で彼女の大腿骨を股関節に押し込み、石膏で動きを固定すると、少しは発達の段階で何もしないよりましになるかも・・・」

治る保証はまったくないと言われましたが、私はそれでも何も手を打たないよりはマシだと思い、先生に頼み込んでその治療を依頼しました。

娘は全身石膏で覆われ、唯一おむつが替えられるようにお尻の部分のみ開いていて、おまけに両ひざには直径3センチくらいの木の棒が渡され、脚の動きを止めるようにされました。

当時10歳の長女でさえ、その妹をやっと抱えられるくらいの重さです。わずかな希望をこの治療に託したのですが、現実にはそううまくはいきません。石膏の上から超音波を当てて映像で見ると大腿骨は股関節のソケットにはまっておらず、意図した位置にはありませんでした。それでもそれを続けるしか選択肢はありませんでした。

それから3か月が経ったその年の9月の中頃のある日、アメリカ在住の私の友達から突然電話がかかってきました。

「そちらに良い音を作っている先生がいるので、その先生の音の資料を送ってもらえないか？」

聞けば時差の関係で、上手くその先生と直接電話で話ができない。代わりにお願いしてもらいたいと。

その友人はウォーターベッドに良い音を入れれば、ヒーリング効果のあるベッドができるのではないかと考えていました。

その先生の名前は
ピーター・ガイ・マナーズ博士。

翌日、私は友人から聞いた電話番号に電話をかけました。

電話に出られたマナーズ博士は、きれいなはっきりとした英語を話され、教養の高さをうかがい知ることができました。

友人から言われた要件を伝えると、

「良い音はたくさんある。何が欲しい？ どこに、どのように、何のために使うのか？」と言います。

そう言われても私にはよくわかりません。

マナーズ博士がときどき「サイマティクス」という言葉を口にしますが、当時の私にはちんぷんかんぷんです。

噛み合わない会話をしばらく続けたのち、博士は

「あなたは何をしている人なのですか？」と聞かれました。

「(英国) 厚生省の研究員をしています」

「ああ、それならばうちの研究室に遊びに来たら、いろいろおもしろいものがあるよ。必要な資料や必要なものは持って行っていいから」

「それでは、お伺いいたします」



数日後、私は博士の研究所兼クリニックに向かいました。
イギリスの庭といわれるコズワルド地方のブレットフォートンという小さな村にあり、ロンドンの自宅からは自動車ですれ道3時間半もかかります。

「その村の中心にある大きな家だから、直ぐ分かる。」

そういわれても、番号も通りの名前もない住所でどうやって見つけるのだろうか、、、村に入って最初に見えたのはパブ（酒場）で、次に大きなレンガの塀で囲まれた家を見つけました。

家へのエントランスには、数台の車が停まり、玄関の横に真鍮のプレートで”Dr. Peter Guy Manners MD”の名前と、”Bretforton Hall Clinic”のプレートがありました。

天井が高く、歴史的な造りのマナー・ハウスのベルを押して受付の人に中に入れてもらおうと、小柄な金髪の縮れ髪の典型的なイギリスの紳士が出迎えてくれました。
これがマナーズ博士との初めての出会いです。気さくに話しかけられ、クリニックの案内をしながら私を研究室に招き入れました。

そしてカセットテープレコーダーに、手に持てるようにしたスピーカーをつないだもの（博士はアプリケーターと呼んでいました）で、いろいろな音を出しました。

「これは、胃に良い音」

「これは、肝臓に良い音」

「この音は背骨を伸ばす」

「この音は筋肉をほぐす・・・」

熱い口調で矢継ぎ早に話され、実際にアプリケーターを私の体に当ててみたりしていました。

「それより（友人から依頼のあった）資料をもらいたいのですが・・・」

「ああ、資料ね。」

「その棚に入れてあるものは好きに持って行っていいよ」

「では、いただいて帰りますね」

「私は患者がいるのでクリニックに戻るけれど、ゆっくりして行って」

アメリカの友達が必要とするものはすべていただき、お礼とお別れを博士に伝えに行きました。

「今から、ロンドンに戻るの？」

「はい、これから3時間半かけて戻ります」

「それは大変だね。あなたは汗をかいているようだから、庭にあるプールに入ってリラックスしていきなさい」

当時イギリスではエアコン付きの車はわずかで、エアコンなしの天窓付きの車が主流だったのですが、私の車も主流のタイプだったので天窓を開けながらドライブをしてきました。

この日は9月のイギリスの気候としてはやたらと暑く、汗をかいていたのです。プールに入っていけというのは、日本でいうとひとつ風呂浴びていくような感じですね。

水着を借りて、博士の邸宅の庭にあるプールに入りました。それは横10メートル、縦20メートルくらいで、深いところでも1メートル20センチほどでした。

心地のよい水温で、すっかり体は軽くなり、スッキリとした気分になっていました。そこに施術を終えた博士がやって来ました。

「水温は如何？」

「気持ちいいです」

水面は私の胸の位置くらいなのに、しゃがんで底に触ろうとすると、体が浮くではないですか。それならばと、勢いを付けて飛び込んでみても、底に手を付けることができない。すると、博士は茶目っ気たっぷりに言います。

「それは、水に見えているけど、水じゃないんだ」
「その横に穴があいているだろう？」

確かにプールの水の中の側面に穴が開いていましたが、水の取り入れ口のように見えていたので、気にとめていませんでした。博士の話では、そこからサイマティクスの音が出ていて、

このプールで半身不随の患者さんや重症の人を入れて遊ばせているうちに、手を動かせるようになったり、足を動かせるようになったりすること。私がスッキリした気分になったり、体が軽くなったのも、このプールの水による効果なのだと言います。

そのとき、私は自分の娘のことが思い浮かび、恐る恐る娘の話をお博士にしてみました。すると博士は笑いながら、

「あなたはね、19世紀の医学に頼っている」
「そんな石膏で固めるようなことをしても、治るわけないだろう」
「うちに連れてきなさい。治してあげるから。」

その時、私は博士が完治を意味する

「CURE（キュア）」という言葉を使ったことに気が付き、おそるおそる「CUREですか？ C・U・R・E？」とスペルまで確認しました。

博士は、「そんな例は幾らでもある。育ち盛りの幼児なのだし。」

「ここなら、本当に治るかもしれない・・・」

そう思った私はさっそく博士と娘の治療のスケジュールを確認しました。博士は始めは1週間に2回来ることを勧めましたが、

共働きのためさすがにそれは難しく、ただ1週間に1回であれば何とか都合を付けて来ることができそうだったので、そのスケジュールでお願いすることになりました。

博士は「とにかく連れてきなさい。治してあげるから」とおっしゃいました。

私はうきうきしながら自宅に帰って妻にその日の話をするのですが、そんな話をしても妻がすぐに信用するわけがありません。

それでも娘を何とかしたいという気持ちは2人とも同じであったので、お互いのスケジュールを調整して、娘を週に1回マナーズ博士のクリニックに通わせることになったのです。

初診は1990年9月の最後の週でした。往路3時間半のドライブは、期待もありましたが正直なところ不安でいっぱいでした。私たちは待合室で約1時間待たされ、ようやく博士の施術が始まりました。

博士はその子が石膏で固められたのを見て「かわいそうに」と言いながら、例のアプリケーターでにより股関節の近くで音をかけ始めました。約2-3分で、次の音を選び、同じようにつけました。そして、次の音を選び同様にしていました。

一通りかけおわると、博士は「はい、じゃあ来週にね」と施術を終了してしまいました。始まって10分も経っていないにも関わらず。私たちは啞然としてしまいました。

そして、治療代もこんな値段でいいのかというような安いものでした。

さすがの私も不安を感じ、帰りのドライブ中に夫婦でいろいろと話をしました。

「あの先生インチキじゃないの？」

「あんなことでこの症状が治るわけがない！」

「同僚にいろいろ調べてもらったけど、そんな先生は出てこなかった」

「でも、あの先生治るといっている」

「とにかく、続けようか・・・」

結局、マナース博士を頼るしかなかったのです。

私たちは週ごと交互に休みを取り、娘をマナース博士のクリニックに連れて行って治療を受けさせました。

博士が施術の途中でアシスタントの看護師に任せるようなときには、出来るだけ長く音をかけてもらえるように頼みました。

それでもせいぜい15分の施術時間でした。毎回帰宅するたびに、今日は何分音をかけてもらったのか、施術で何か変化はあったのかといった不安ばかりを話していました。

でも最後には「あの先生は治るといっている。とにかく続けよう」と自分たちを励ましました。

9月の末に1回の治療、そして10月、11月と各週1回の治療が続きました。12月に入り、街はクリスマスムード一色になる頃、娘を石膏で全身を固める治療をしていた医師から、クリスマス休暇を20日間ほど取るので、休暇前に担当の患者を全て診ておきたいとの要請がきました。

その医師は、娘の石膏の状態や皮膚の状態などを調べ、超音波で石膏の上から股関節の状態を調べ始めました。

すると、その医師の顔色が変わりました。

その医師が急に席を立ち「ちょっと待ってください」といって隣の部屋に入りました。隣の部屋とはいえ、医師の声は良く聞こえていました。どうも看護師長やレントゲン技師が呼ばれ、レントゲン写真を見ているようでした。

「このレントゲンは誰のか？」

「本当にあの子のか？」

「取り違えていないか？」

しばらく経ってから医師が戻り、言いました。

「何が起きたのか分かりませんが、あなたの子供の右の股関節は正常です。」

「とにかく、私が休暇から戻ったら、石膏を取り外しあらゆる検査をして何が起きたのか調べます。

それまで、このままの状態にしておいてください。」

毎年手術をしないといけないと言われていた難病が、本当に完治したかもしれない。。

年が明け、1991年1月10日に、この関節の専門家の医師が休暇から復帰し、私たちの娘を最初に診てくれました。

石膏を取り外しましたが、長い間石膏のなかにあった皮膚は汚れ、一部擦り切れて赤く血が出ているところもありました。

きれいに処理をしたのち、レントゲン撮影、MRI、超音波など様々な検査を受けました。

その結果を見て、医師は「あなたのお子さんは、異常な発達をしたとしか考えられない。全て正常です。

ただ長く石膏で体を固定していたので、筋肉が弱っています。

少しの間コルセットを使って少しずつ筋肉がつくのを待ちましょう」と言いました。

私はマナーズ博士のことや音の治療のことをその医師に伝えましたが、「それとは関係ないと思います」との意見。

「いずれにしても、私は医者としてこんなケースは初めてなので、よろしかったら彼女の成長の記録を取らせて下さい。3か月ごとに測定し、3歳の誕生日まで続けます。よろしいでしょうか?」
私たちはその医師の申し出に快く同意しました。

私はこの経験を通じてマナーズ博士のサイマティクスセラピーに大変な感銘を受け、サイマティクスに関する技術や医療を学ぶことを決意。

1991年2月にブレットフォトン・ホール・クリニックの門を叩きました。それから2009年8月にマナーズ博士が亡くなるまで、博士の同僚として研究開発をしながら、博士の深い見識や思想に触れてきました。

そして私自身もセラピストとして45,000人以上の施術活動を行い、数々の奇跡を目の当たりにしてきたのでした。

現在、私とマナーズ博士をつないでくれた娘はすこやかに成長し、体育の先生もついていけないほどスポーツ万能、ブレイクダンスの好きな、元気いっぱいの女性となりました。

イーマ・サウンドの原理

～ マナーズ博士の夢の実現 ～

英国の医師、サー・ピーター・ガイ・マナーズ博士は、
スイスの物理・生理学者ハンス・イエニー博士が物理の一分野として
開拓したサイマティクスのフィルムを見て、
この原理が人体に応用できると確信しました。

その頃アメリカではエール大学のバー博士が、人体の周りに彼が呼ぶ
「ライフ・フィールド」という、生体場の存在を確認していました。

これらのことから、マナーズ博士は、

「人体には健康な細胞や臓器が出している健康な生命場があり、それらは鑄型として存在し、その鑄型を維持しているのは音に違いない」と推察し、それを発見する研究を始めました。

つまり、そのような音を見出すことができれば、
その音を不調や病気になった細胞や臓器に適応すれば、
健康な状態に戻すことができるのではないかと仮説を立てたのです。

今でこそ量子力学で語られるようなことではありますが、
第二次世界大戦直後のあたりにすでに考えていたわけです。

しかし、戦後で物資も研究材料もあまりなく、あらゆるものが
不足の状態でした。そのような状態で彼の仮説を実証しようにも、
どこから手をつければいいのかさえ分からない。

試行錯誤すれどもあまりよい結果は出ない状態でした。
そのような中で、ナチスドイツでは捕虜にしたユダヤ人を使い、
いろいろな人体実験をしていたとの噂を耳にしました。

彼は母校のオックスフォード大学の推薦を受け、英国からのインターンの医者留学生として、ドイツのハイデルベルグ大学の付属病院に赴任しました。

彼には、ひょっとすると潜伏しているナチスドイツの人体実験をした医師に会えるのではないか。そのような期待と共にインターンとしてその病院で勤務をしておりました。

ある日、ブルーノ博士（仮名）という医師に会い、その博士はマナーズ博士の話に非常に興味を持ちました。

この博士こそ、ユダヤ人を使い、いろいろな人体実験をした医師の一人でした。もちろんそのようなことは公にはされていません。

この博士やその他の医師は、彼らが1930年代にマナーズ博士が仮説を立てたようなことを実験し、それを人体実験で確認をしていました。この成果が後にドイツやロシアの波動医学として、花を咲かせることになります。

これらの医師の協力を得て、マナーズ博士は体の周波数測定の方法や、どのあたりの周波数が臓器に対応するかなどの知識を得ました。

この知識を英国に持ち帰り、彼独自に研究をして、今知られているマナーズ博士の発見した音の周波数を特定しました。

それでも、例えば健康な胃が出している周波数の割り出しに、毎日それだけを研究し続けて3年の月日を要しています。

これについて、マナーズ博士は常に「この周波数は多くのユダヤ人の犠牲の上でいただいた、人類への彼らからの贈り物だ」といって大切にしていました。

そのため、いろいろな人のアドバイスにも関わらず、博士は自ら発見した周波数を公開し、特許の申請は一切しませんでした。

近年、この周波数の割り出しには、いろいろな手法が取られ、より簡単に発見できるようになり、一部の人は特許などを取って一人占めしようとする向きがあります。天国のマナーズ博士は何と云うでしょうね。

1990年当時に使われた周波数は、マナーズ博士が100年くらいは変えなくてよいと言っていました。時代の変化はそんな悠長なものではありません。

現在、マナーズ博士の割り出された原理（マナーズ原理）に沿って音の見直しが進められています。

一部、そんなに大きなものではありませんが、修正が必要になっています。

この原理を使って割り出された生命の音を私たちは「Msライフサウンド」と呼びます。

博士は一つ一つコツコツと周波数を割り出しましたが、その細胞や臓器にかける（聞かす）時には、一般には5つの周波数を合成した音を出します。

これは、細胞や臓器は生きているからです。

よくある一つの周波数がこの臓器の周波数という人がいますが、そうするとそれは死んだ臓器です。

事実、ある波動医学の適応では死んだ臓器の周波数が使われていることがあります。

心臓を考えるまでもなく、全ての細胞は生きています。
ということは変化します。心臓の鼓動のように変化します。
細胞も振動します。

それならば、健康な細胞や臓器の音は変化しなければなりません。
入れたり出したり、呼吸をします。

でも、目標値はあり、その上下のある幅以内で変動します。
それが、生きたものの姿です。

このことから、Msライフサウンドはこれらのことを
全て満たした音ということになります。

さらに、研究が進むにつれ、
マナーズ博士は自分の仮説が逆であったことに気づきます。
すなわち、

**「人体には健康な生体場が先に存在し、
それは音で維持されており、そこに材料としての細胞が成長して、
その場を埋めるように発達する」**

現在話題になっているIPS細胞が、なぜ心臓に入れられると
心臓の一部の細胞として発達し、同じものが骨に入れられると
骨の一部となり、まちがっても心臓に骨ができるようなことが
起こらない理由であります。

つまり、IPS細胞はその場が出している音に反応し、
何になるべきかを判断している。
少なくとも、マナーズ博士はそのように考えていました。

それならば何かの理由で子宮を摘出した女性は、臓器としての子宮は存在しませんが、その健全な「場」として音でつくられた目で見えない「場」の子宮がまだ存在していると考えられます。

その「場」に万能細胞を入れて、その場をMsライフサウンドで強化してやれば、正常な子宮が「生えてくる」はずだと。

その実験をマナーズ博士は生前進めようとしていました。マナーズ博士は、「とかげでさえ、尾っぽを生やすことができるのだから、人間は手足位生やすことはできる」と考える人でした。

マナーズ博士が、一番危惧していた問題は「老化」です。「世界的な浪費だ！」とっていました。

彼は、「老化は不必要な病気」との見方で、細胞のコピーが上手くいかなかったため、ちゃんと20代の健康な音をかけていると、

私たちの細胞は7年で全て入れ替わるので、皆20代に戻ると考えていました。

そうなると、今の老人は人生経験豊富で、いろいろな知識や体験を社会に還元でき、世界を変える力となる。そのようにマナーズ博士は考えていました。

実際、彼自身の体を使ってそれを実践して見せられました。世界でもマナーズ博士の音の活用で、若返ったとの報告は相当数にのぼります。

博士は最高な治療の現場は、無重力状態が一番で、その次は水の中といます。

なぜなら音が人体の全てに同時に集中的に届かすことができるからです。

博士のクリニックであったブレットフォトン・ホールには、庭に室内温水プールがあり、冬でもこの部屋は常夏で水温は39度くらいに保っていました。

このプールはできてから一度も水を変えておらず、少なくとも私がいた頃で10数年経っておりました。

塩素を入れてもすぐにその塩素が消えるし、水質検査をしても全く問題にならないくらいに微生物が少ないプールでした。

そして、浮力がついているので、体が異常なくらい軽くなるプールでした。それは、水中スピーカーが、健康な音を24時間流し続けていたからです。

そうすると、水分子がバラバラになり、水素と酸素がバラバラになって共存するような状態になります。

これを、博士は「水に見えて水でない」状態と呼んでいました。

とにかく、体が軽くなる、半身不随のような人でさえ、体を軽く動かせることができます。

それで、体を動かせた体験が、自信となり本当の回復につながるのである。

また、この水に音を入れる応用として化粧水や飲料水などができます。

マナーズ博士は、いろいろな実験を死ぬまで続けておられましたが、その当時の技術の発達や材料の不足のため、不本意な効果でありました。

それでも偉大な功績を残されたのですが、彼が本当にしたかったことは、彼の代ではできませんでした。彼は常々「本当のライフサウンドが出たら、瞬時に効く」と言われましたが、それは実現しなかったのです。

しかし現在の技術で、彼の提唱したことを実現すると、効果を出すのに5分かかっていたことが、1分あるいはそれ以下でできるようになりました。

彼が提案していたアナログのステレオ音で、パルスをある比率で出すこと、光を併用して、それもその音と比例して出すこと、水の活用をできるだけすること、磁場の変化を人体に合わせること、などです。一部のことは私たちも実現してみましたが、その度に、彼の先験的考察の深さに感動します。

今私たちが使っている「イーマ・サウンド」はマナーズ博士の見出した音を更に進化させ、能力を高める作用のある音を加えており、ステレオでパルスを発生させ、光の変化も併用するかたちで適応されています。

これにより博士の見出した音の効果の20倍くらい効率が良くなりました。

さらに、昨年2019年に開発した新しい施術デバイス「OTOtron（オトロン）」により、その効果が著しく向上しています。

生体は、各組織が奏でる音のシンフォニーを発する
オーケストラさながらのようです。

それらの健康時の音に、更に健康な組織が本来持っている能力を
高める音を加えて、その組織に「聞かせ」、
生体を共鳴共振させることで、各組織が持つ本来の能力を高める
きっかけを与えます。

このようにいくつもの音を同時に重ねて、
各組織が健康と能力向上の振動音（イーマ・サウンド）を
同時に「聞く」ことで、自発的に本来持つ振動を取り戻し、

細胞が活性化され、健康な状態に導かれ、
更に生体が本来持つ能力を最高に発揮しようとするのです。

この現象を「イーマ・サウンドの原理」と呼び、
この状態が「超健康」です。

これから、現在ある様々なものが、
イーマ・サウンドの原理を応用して修正されることになれば、
それを使えば使うほど、人体を元気にし健康にするものへと
変身し、私たちの能力を最大限に引き上げる道具となり、
私たちを「超健康」状態にするでしょう。

先人への感謝の気持ちを忘れない ～人類への贈り物～

世界では「サイマティクス・セラピー」という名称が一般的に使われていますが、日本国内での展開を進めようとしていたとき、すでにその名称の商標が取られているということがわかりました。

そのため、その原理やセラピー名称に「マナーズ」を冠しようという声が会議参加者より多数上がりました。

これについて博士は大反対で、頑としてそれを認めず、駄目だと言いつけました。

博士と一緒に来日した、福岡の会議でのことでした。

約2時間以上の説得、奥様の説得などなどで、ようやく渋々認めていただいたという経緯があります。

その拒否の理由は、「マナーズ」という名前がついてしまうと、その原理、セラピー、医療に貢献した人々のことが忘れられ、全てマナーズ博士のみが見い出したことのようになるからというものでした。

例えば、ハンス・イエニー博士、ハロルド・バー博士、クリスチャン・バーナード博士、ブルーノ博士（仮名）などです。

これらの人々の話は、私たちもセミナーや講演でお話しはしているつもりですが、やはりだんだんとセラピストやそのことを学んだ人々の間では忘れられ、マナーズ博士のみの手柄という風に変わってきました。

これは、ある意味マナーズ博士が危惧していた状態です。

特に、博士はこの周波数を導く過程でナチスドイツの犠牲となった、名もない多くのユダヤ人のことを忘れないでほしいと。

常に博士は

「この周波数はそれらの犠牲者たちからの人類への贈り物」

という考えで、自分が長い時間かけ割り出したということはあまり強調されませんでした。

もちろん博士はそれらの人体実験に関わったわけではありません。ドイツを占領した連合軍によってほとんどの研究資料が焼かれましたが、それでも残った一部の資料を手にすることができた。

そして、その資料からヒントを得た。それで、博士は常にそれらの人々への感謝を忘れていませんでした。

マナーズ博士が定義する「セラピー」とは

サイマティクスセラピーやイーマ・サウンドセラピーの名前にも入っている「セラピー」ですが、

マナーズ博士は「テラ（男性性としての地球）と共鳴する」という意味として定義していました。

これがいつの間にか世間では治療に順ずるような意味で使われてしまっています。このことはマナーズ博士の考えと、全く逆の発想です。

よくマナーズ博士は、
「何々病はどうすれば治るのでしょうか？」とか、
「どの音が何々病に効くのでしょうか？」とかの質問に対し、

「私はそんなチャチなことを研究していない。
**その人が持った能力を最大限に発揮できるような状態に持っていく
為に、どうしてあげれば手助けになるかを考え研究している。」**
と答えられていました。

正に真の健康状態（私たちはこれを「超健康状態」と呼んでいます）にする研究をしていたのです。

そして、人は超健康状態で人生を終えられると考えていました。

つまり、100歳の人でも20歳の体と頭をもって、
人生を終えられると考えていました。彼にとって、

老化は一種の病気で、そうならなくて済むようにできる。
女性の更年期障害もならなくてすむと考えていました。

その方法は**人間が宇宙の法則に沿って生きれば良い**と考えていました。

その法則に沿っていないから、私たちは病気とかに悩むことになる。では、それはどのようにして生きる事なののでしょうか？

博士は「それには自分の体がしようとしていることに良く注意を払うことだ。体に聞くことだ。」と言っておられました。

具体的には、例えば、風邪をひいたとき鼻声になりますが、それは体に入った菌を体外に出す為にそれらが居座れないような環境にするためだ。

お酒を飲み過ぎた時とか、疲れたときには、いびきをかきますが、それはアルコールを早く分解する為、疲れを早く取る為の体のメカニズムだ。そう考えていました。

音楽の作曲家も無意識に自分の体を癒す音を選ぶという、確かに自分の嫌いな音楽は作曲できませんよね。

そうして選んだ音（音楽・振動）はその作曲家のみならず、それを聴く人々を癒す手助けをする。

チャイコフスキーは癲癇持ちでした。そのため癲癇をもっている人にとって効果のある音が彼の曲には存在しています。

一時モーツァルトの音楽が元気にすると騒がれていました。彼は音楽の天才でしたが体はガタガタでした。そのため自分の体に効く、元気にする音（音楽）を作りました。

だから、現代の人をも元気にする音楽なのです。
マナース博士はそういう観点で人を診ていました。

だから、肢体の不自由な人がきて奇声をあげていると、
「すぐにテープレコーダーを持ってきなさい！」と指示され、
その奇声を録音しました。

それをその人に聞かせ、一緒に声を出させる為でした。
その音（声）には動かないところを動かせるようにする振動が出ていて、そのところが動けるようになる。そのように考えていました。
確かに、時には劇的な改善がありました。

皆さんもカラオケで歌いたいお気に入りの曲があると思いますが、
その曲のどの部分が特に唸りたいですか？
その部分、そのコブシのところにあなたの状態を
改善する音があります。

そして、それをあなたはあなたの声で唸らなければならないのです。
他人の上手な声を聞いてもあなたの問題の解決にはなりません。
自分で唸らなければならないのです。
音痴でも、その声でなければ効かないのです。
セラピーとは、自分で共鳴共振して地球と同調することなのです。
他人は手助けのみです。

心理的な面でも、よく人生の問題に直面すると人は海辺に行き、
裸足で砂浜を歩きたくくなります。
これは、人体にある炭素の元素に作用しやすい砂（ケイ素）の上を
歩きあるいは寝そべり、背骨にある脊髄液の振動と
共鳴しやすい海の寄せては引いていく波音を聞いていると、
体の不調が調律され和み、その問題を乗り越える力が
湧いてくるからです。

また森林や山の静かなところを散歩したくなりますが、これは乱れた体の振動に不足する音を聞かせてバランスをとる為です。

私たちには、そこは静かな場所と感じますが分析すると、細かい耳に聞こえない音がたくさんある場所なのです。それにより不足な部分を補います。

このように彼の研究の究極は、**体が自然にしようとしていることを手助けしてあげれば、その人本来がもっている能力を最大限にのばしてあげることができる**というものです。

彼は病気と闘うという風には考えていませんでした。ガンについて、マナーズ博士はここに2種類の細胞がある、

一つは最大で120年の寿命がある、もう一つは1000年以上生きる、どちらが正常なのか？ガンと呼ばれている細胞は、今正常細胞として扱われているものより、はるかに現代の状況で長生きする。

ならば、今ガン細胞と言われているものこそ、これからの時代に生きていく細胞ではないか？そう考えていました。

そのためには現在の正常な細胞というものを、上手にガン化（？）して長く生きるものに出来ないか？そのように考えて研究していました。

戦うのではなく味方にするという発想でした。そのため彼が見出した複合調和音には、何かを殺すとかというものはなく、ただ追い出すとか、正常な状態に戻すとかのみです。

マナーズ博士に会ったことのある人は皆、
彼の温厚でやさしい人間性に触れ、こころが癒されました。
こんな人間がいるんだと。

しかし、その温厚さのために多くのペテン師や詐欺師に会い、
最後には経済的に破たんして、自宅そしてクリニック兼研究所を売りに
出さなければならぬ状況になりました。

負債額が大きく私たちの手助けできるレベルではありませんでした。

彼が研究できる状態を維持できていれば、たぶんまだまだもっと活躍さ
れ、偉大な発見・発明があったと確信しています。

彼が早期引退などしたくなかったのは明らかでした。
まだまだやりたい、興味のあることがいっぱいでした。

私たちが博士と同席してサイマティック議論に花を咲かせると、
子供のように好奇心いっぱい、いろいろな実験について、
理論についてお話しされていました。

このマナーズ博士が夢見た、皆が超健康な世界

これを皆さんと一緒に実現していこうではありませんか。

